ふみくら

No. 68
2001. 12. 15
早稲田大学図書館報

小杉天外著『摩風恋風』 前編口絵　梶田半古画

《目　次》

西早稲田キャンパス学生読書室のWINEシステムへの移行……2
社会科学部学生読書室のWINE参加について……5
渡邊　幸弘（高田早苗記念研究図書館）
「クリューニッツ大百科事典」の紹介……6
大久保　進（文学部教授）
第９回INNOVATIVEユーザ会参加報告……8
河口　和子(学術情報課)　多田　智子(雑誌課)
展覧会開催報告　2001.3-7……10
展示部会
新しい情報検索サービス……12
藤巻　俊樹(調査役)
慶應義塾大学図書館・同志社大学図書館との相互協力……14
高額資料選定結果　2001.3-7……15
資料委員会
図書館日誌……15

西早稲田キャンパス学生読書室のWINEシステムへの移行

図　書　館

はじめに

2001年9月から法学部学生読書室、ついで教育学部学生読書室がWINEシステム(中央図書館やキャンパス図書館で稼働している図書館システム)で検索や貸出返却などの稼働を開始した。両図書室の所蔵データはWINEデータベースにすでに移行しており、Web環境さえあれば、どこからでもアクセス可能になっている。すでに社会科学部学生読書室が2001年４月からWINEシステムへの移行を実施しており、同一検索画面上で中央図書館や戸山図書館、理工学図書館、所沢図書館などとあわせ三学生読書室の所蔵状況を確認できる。

これまで学生読書室は組織的位置付けや運営の独自性等から課題が箇所内で完結し、またそれなりに機能する状況にあった。今回のWINEシステムへの移行を機に、他図書館との調整という新たな状況が生じてきていることもあり、あらためて学生読書室の状況を報告する。

１．学生読書室の設立と特徴

学生読書室は戦後の新制大学制度発足にともなっておかれ、1960年代の学部学生、大学院研究科学生の拡大に対応する形で急速に整備されてきた。その運営経費（図書購入費用を含む）の一部が学生の負担であり、貸出制度の充実など学生の利用を優先した運営方針やカリキュラムなど学習内容にそった収書方針をはじめとして箇所に密着した形で運営されてきたところに特徴がある。したがって収集する資料も保存を前提とした基本財産図書というより利用を優先した消耗品扱い図書の性格を持つ。また箇所によっては運営についても一部を学生の自主性にまかせるなど箇所の特性にあわせた形態がとられてきた。

1980年代後半になるとキャンパス図書館を中心に新たな展開がはじまる。1980年代半ばから創立百周年記念事業として新中央図書館の建設が課題となるが、その検討経緯の中で新中央図書館は研究・学習の両機能を併せ持つ施設として設計された。同時期に整備されたキャンパス図書館にも、このことは反映され、1987年の所沢図書館、1992年の戸山図書館も学生読書室機能を包含したキャンパス図書館として整備される。また理工学図書館も研究図書館（51号館）と学生読書室（52・53号館）とに物理的には離れて存在しているものの、1989年には組織的にはキャンパス図書館として一体のものとして位置付けられている。

一方、西早稲田キャンパスでは旧図書館（２号館）の一部が高田早苗記念研究図書館として再整備のうえ開館（1994年）し、雑誌等を管理する教員図書室などとあわせ研究者のための研究図書館機能を果たすよう位置付けられているが、学習図書館機能を受け持つ学生読書室は従来同様の形態で並存して現在に至っている。

２．貸出システム等の機械化と課題

早稲田大学図書館の機械化への取組みは早く、すでに1984年から書誌データとしての蓄積をはじめるが、図書館のトータルシステムとしてのWINEの本格稼動は1987年の所沢図書館の開館からとなる。その後中央図書館や他のキャンパス図書館などに範囲を拡大し、書誌・所蔵データベース（書誌159万件、所蔵316万件、2001年10月現在）を共有し、本格的なネットワーク利用を稼動している。この間1998年には現在のINNOPAC（アメリカのInnovative社が開発した図書館システム）をベースにしたシステムに更新している。

これらの図書館システムとは別にそれぞれの学生読書室でも、貸出業務などを中心にした機械化がはかられてきた。1980年代後半に理工学部学生読書室で貸出管理システムの機械化が実施されると西早稲田キャンパスのいくつかの学生読書室でも同様のものを導入する。1990年代の半ばになるとリース期限切を機に、いわば第２次のシステムの導入が課題となる（別掲の渡邊氏の報告を参照）。

主管箇所である教務部の調整により、政治経済学部、法学部、教育学部および社会科学部の四学生読書室で、ネットワークこそ形成しないものの、おなじ日本IBM社のLibVisionシステムを採用した。これらのシステムは貸出・返却管理からさらに進んで書誌・所蔵データ管理を伴う図書館システムであり、利用は貸出を中心に飛躍的に拡大した。

このように順調に機能を発揮していたシステムであったが、2000年度のシステムリース契約期限切を前に以下のような課題が明確になりつつあった。

①検索利用上の制約

コンピュータ教室の整備やパソコンの普及が進展したことにより、場所を選ばず検索できる環境が整ってきたことから、利用者から読書室まで行かなければ図書の所在状況がわからないシステムはWINEに比べて利用しにくいと指摘された。

②システムの維持管理および経費負担

2001年３月でリース契約期限がくるが、納入業者から現状どおりのシステム維持はできないとの通告があったこと、また今後のバージョンアップにあたってはサーバ等を含めメンテナンス費用および機器価格において高負担が予想された。

③担当要員確保

箇所によっては、システム管理も含めた担当者の確保が課題になっていた。

３．WINEシステムへの移行

上記のような課題が明らかになりつつあるなかで、直接には2001年度予算申請を契機として学生読書室システムの調整が本格化した。図書館はシステムのハード管理および予算の所管箇所である教務部情報企画課と連携をとりつつ、図書館システムを大学全体の問題としてとらえ、学生読書室担当者とも調整をはかりながら検討した。その結果、図書館としては、以下の点などを理由に、学生読書室がWINEシステムに移行するのが望ましいことを図書館の基本的考え方として提案した。

①同一インターフェースで情報の共有ができる。

②WINE契約を変更することなく現行の範囲内で学生読書室稼働をまかなえ、経費の効率的支出が期待できる。

③システムメンテナンスを含め管理をWINE一本に収斂できる効率性。

結果として各箇所からWINEシステム移行への方向性について基本的了承を得た。

WINEシステム移行へ基本的了承を得たが、2001年度からWINEシステム移行を実施するにはいくつかの課題があった。うち重要なものは現行システムで使用しているデータの移行である。データの精度がまちまちであるなどの理由により、一括機械処理が難しいこと、各読書室で所蔵しているデータの量に差があること、学生の利用と準備を調整する必要があることなどを考慮して稼動開始日を次のように設定した

2001年４月－社会科学部学生読書室

2001年９月－法学部学生読書室

2001年９月－教育学部学生読書室

2002年４月－政治経済学部学生読書室

2002年度中　商学部学生読書室

なお先に述べたとおり社会科学部、法学部、教育学部の各読書室はすでにデータ移行を終了し、システムを稼動している。

４．共通利用規則の運用

これまで各学生読書室は原則として当該学部の独自性のもとに、蔵書構築・施設設備を維持・運営してきている。したがって、西早稲田キャンパスの各学生読書室の利用においては、教育学部、社会科学部学生読書室の共同利用（貸出可能）を例外として、他学部の学生は閲覧・コピー利用のみ可能で、貸出はできなかった。

今回WINEシステムに移行した学生読書室の情報がWINEデータによる共有化へ前進したことにより、当該学部生以外の学生の貸出希望が増える結果となった。このことはオープン授業、学際領域授業の増加など学内の動きも要因として指摘できる。また図書行政懇談会（第一次）答申を受けた中央図書館・キャンパス図書館における利用規則の平準化の実施も大きく影響していよう。

これらを踏まえ、当該学生読書室間でさらに一歩進んだサービス体制の検討が課題となった。9月からの法学部、教育学部学生読書室のWINEシ

ステムへの移行を機に、社会科学部学生読書室を含めた三読書室間の貸出規則の共通化の実現である。この前提として何度も触れるように、各学生読書室の存立意義や独自性が最大限尊重される必要性が確認されたことは言うまでもない。各該当読書室の担当者や図書館の関係者を中心に法・教育・社会科学部の学生読書室の共通貸出規則を検討し、それを基に、最終的には三学生読書室毎に既存のサービスが拡大することを基本とした原案を作成し、各学部の教務担当あるいは図書委員会へ提案した。

幸いにも各学部当局からのご了解をいただくことができ、すでに広報されているとおり９月から３学部学生読書室の共通貸出規則（図書館HP　トップページ「学生読書室（法・教育・社学の利用規則について）」参照）で施行されている。現時点では当該学部生等以外の学生への適用はできないが、該当箇所の判断を前提として、利用状況の実績次第では、利用範囲の拡大については検討課題になりうると考えている。

おわりに

この９月からの三学生読書室によるWINEシステム運用と共通貸出規則適用から約１ヶ月が経過するが、さしたるトラブルもなく、順調に運用している。また現在、政治経済学部学生読書室の2002年4月のWINEシステム稼働に向けて、データ移行等の準備が順調に進行している。現行システムの整備等から準備が遅れがちであった商学部学生読書室も2002年９月にはWINEシステム稼動ができそうな見通しである。

先ごろ学生部から「2001年度　第20回学生生活調査報告書」、監査室から「監査報告書　学生サービスの現状の把握」があいついで公表された。ともに図書館の利用について関心の高さを指摘している。それらによると総じて中央図書館、学生読書室は利用しやすい環境にあり、半数以上が1週間に2，3日利用するなど図書館の存在が学園生活と密接に関係していることを示している。

図書館としてはその整備・充実があらためて問われていると受止め、引き続き大学院学生読書室のWINEシステム参入やさらなる利用者サービスの向上につながることを模索していきたい。

【本号表紙写真】

小杉天外著『魔風恋風』　前編口絵　梶田半古画

春陽堂刊　明治37年(1904)5月(4版)　文庫14　D577

小杉天外（1865～1952）は秋田県出身の小説家。明治30年、島村抱月・後藤宙外らと雑誌「新著月刊」を出し、「深刻小説」を書いたが、世間一般には、明治36年に発表した通俗恋愛小説『魔風恋風』で有名になり、流行作家となった。これには、当時新進の日本画家梶田半古（1870～1917）の描いた挿絵が評判になったことにもその一因がある。はかま姿で髪をなびかせ自転車に乗るヒロインの女学生は、当時の先端的ハイカラ風俗をあらわしていた。一世を風靡したこのファッションは、いまも卒業式の定番スタイルとして残っている。

社会科学部学生読書室のWINE参加について

渡邊　幸弘（高田早苗記念研究図書館）

社会科学部学生読書室（以下、社学学読）では、本年４月１日より貸出・返却および検索システムを図書館で使用しているWINEシステム（以下、WINE）へ移行いたしましたので、報告かたがた経緯と現状を述べさせていただきます。

社学学読のシステムは、1996年４月よりそれまで使用してきた貸出システムを日本IBM社のLibVisionシステム（以下、LibVIsion）へ移行しました。もともと、学生読書室という性格上、他学部の学生への貸出や閲覧は余り考慮されておらず、以前のシステムは、単に貸出返却のみをパソコンで行うだけの単純なものであり、目録データも検索できるようなものではありませんでした。このシステムを導入したことで、これまで利用者に不自由をかけていた蔵書の検索が可能になり、それまで３千数百冊程度だった年間の貸出冊数が2000年度末には8,684冊にまで増加しました。そして2000年度にリースが切れることを契機として、LibVisionのバージョンアップを行うか、WINEへ参加するかという検討を行いました。バージョンアップを行うとすると、蔵書の検索はWebで行うことができるようになりますが、これまで通り学読の蔵書は学読の検索画面からしか所蔵を知ることができないのに対して、WINEであれば、図書館の蔵書はもちろんのこと社学学読の蔵書も一覧できるようになり、利用者には非常に便利になります。予算面やこういった利便性を含めて次期図書館システムをどうするかを学部の先生方や図書館と検討した結果、学部としてWINEへの参加を決定しました。

WINEへ参加するに際しては以下のようなことが問題となりました。まず第一に、学読既存の蔵書をどのようにWINEへ反映するかということです。これまで図書館でデータを遡及するという場合、概ね現物を使った入力を行ってきましたが、社学の蔵書は少ないとはいえ14号館という別の場所にあり、その運搬が問題となりました。また、サービス開始を4月1日としていたため、現物からの入力では時間が足りませんでした。そこで、LibVisionから書誌・所蔵情報を抽出し、リストの形でWINEと照合するという方式が取られました。その結果、約40,000件のデータの中で約28,000件がHitデータとして登録され、残りの12,000件については、当初はダミー書誌（貸出のために便宜的に入力されたデータ）として登録されましたが、9月末現在で約半数の6,000件にまで減少しています。また、学読では極力書誌情報は扱わないという観点から、新刊書の入力については図書館にお願いし、所蔵データ付与のみを学読で行っています。第二に、WINEでは12桁の資料IDシールを使用しています。これに対して学読では7桁であり、そのままではWINEで使用している番号と一致してしまうものも出てくるため、12桁に変更することになりました。貼替えについては、利用頻度の高いものを中心に3月末まで行い、WINEへの参加以降は、未貼替えの資料は貸出の際に貼替え、時間があるときにそれ以外の図書への貼替え作業を行っています。第三に貸出等に関する規則の変更です。前にも記していますが、学読は学部生のための図書室です。よって、その規則も学部に則したものになっています。参加当初は、学読は社学だけでしたが、法学部、教育学部が参加することもあり、共同利用を念頭にしてそれぞれの学部で検討を行い、9月以降3学部による共通規則による貸出が実現しました。これにより3学部と法研、教研、社学研（および理工研）の学生が3室で貸出できることになりました。

WINEへの参加によって、これまで学読へ来なければ検索できなかった蔵書が図書館やコンピュータルームあるいは自宅からでも簡単に検索ができるようになり、前記3学部以外からも多くの利用者が社学の学読へ来室するようになっており、毎月の入館者数も昨年より数百名ずつ増加しています。

「クリューニッツ大百科事典」の紹介

大 久 保　　進 （文学部教授）

この度2000年度の文部省の助成をえて購入された標記新収資料（『ふみくら』No.67の15ページを参照）を、購入申請者の責任の一端として、以下に簡単に紹介します。

「クリューニッツ大百科事典」はベルリンで1773年に第１巻が出版され、1858年に第242巻の刊行をもって完結した、前後86年におよぶ、ドイツ語による百科事典の出版としてばかりでなく、18／19世紀ヨーロッパにおけるそれとしても空前絶後の大事業でした。もともとはスイスで出版された同種の16巻本フランス語版百科事典の個人による翻訳・翻案版として出発したものですが、著者ヨーハン・ゲオルク・クリューニッツ（1728－1796）は第３巻においてすでに明白にドイツ語版としての独自な計画を意識し、以降はこの計画実現のために精力的に仕事を続けることになりました。しかし無論当然のことですが、収載事項のすべての記事について彼がオリジナルに原稿を書き下ろしたわけではなく、彼は無数の文献・資料を精力的に利用して編集・執筆しました。そのために蒐集された著者の膨大な蔵書は有名で、チュービンゲン大学図書館にある「クリューニッツ文庫売り立てカタログ」には、1万5千冊をこえるタイトルが記載されているそうです。1796年に彼が亡くなるとフリードリッヒ・ヤーコプ・フレールケン（1758－1799）が、彼が亡くなると弟のハインリッヒ・グスタフ・フレールケ（1764－1835）が、そしてさらにヨーハン・ヴィルヘルム・ダーフィト・コルト（生没年不詳）と二人の助手が仕事を引き継ぎ、完成しました。

本書の原題は、最初はOekonomisch-technologische Encyklopädie, oder allgemeines System der Land- Haus- und Staatswirthschaftで、主タイトルに変更はないものの、oder以下の副タイトルが途中二度拡張され、最終的に（1799年以降）はallgemeines System der Staats- Stadt- Haus- und Landwirthschaft und der Kunstgeschichteとして完結しています。そのまま日本語にすれば、主タイトルは「経済・技術百科事典」となるでしょうが、「技術」はともかく「経済」には現代日本語のレベルで誤解の余地がありえます。それは、ドイツ語のWirt(h)schaftが「経済」の訳語内容に定着するにいたる語史的なレベルからばかりでなく、副タイトルからもただちに明白です。あえて言えばそれは「経営」でしょう。つまり、国家-、都市-、家-、土地-経済ではなくて、国家-、都市-、家-、土地-経営です。では、これらの語はクリューニッツにおいて何を意味していたのでしょうか？　土地経営は今なら農業でしょうし、家経営は同様に家政でしょうが、本書第１巻の「序言」でクリューニッツは、土地経営として農業生産と自然の産物とを、家経営として自然の産物および農産物の加工・製品化を考えています。そして、国家経営は（一度目に副タイトルが拡張された1785年に都市経営の語が追加されています）、このような土地経営と家経営に関する管理・規制と組織・機構と助成・振興の諸課題の枠内で言われています。（してみると、副タイトル最後の語の意味は今で言う芸術史・美術史ではなくして、技術史・技法史ということになるでしょう。）本文に取り上げられた無数の項目とその記述内容に徴して、彼がその「一般的体系」の語で括ろうとしていたところのものは、自然の現象および産物と、農業や牧畜や漁業や林業や園芸や果樹栽培とその技術そしてその生産物であり、それらの産物の加工業とその技術そしてその製品であり、それらの販売（商業）と享有（家政）であり、こうした一切に関連する行政上・法制上の諸問題だった、とここではとりあえず説明しておきます。しかし、ある意味で当然のことですが、本書がこのような意味での「経済・技術」の分野をこえて、その他のさまざまな文化的領域のきわめて多様な対象にも目配りしていることも、忘れるわけにはいきません。

ところで、「体系」たることを目指して、各項目の、とりわけ大項目の記述内の体系性を求めるばかりでなく、項目間の相互参照の便のために工夫を加え、必要に応じて参考文献を提示することを忘れない編集・執筆の目標が見事に実現されているかどうかについては、今の私には判断できません。しかし「一般的」たらんとする方針は、取り扱う対象の広範さの点でばかりでなく、貫かれているのではないでしょうか。というのも、傍証として言えば、同時代のいくつもの書評が、その刊行と完結の遷延を嘆き批判しながらも、専門家にとってばかりでなく一般読書人にとってもきわめて有用な仕事として、本書の繙読を繰り返し推薦し、その一般的な活用を勧めているからです。

こうして、本書（大八折判、全242巻）の本文（見出し項目の配列はアルファベット順、項目総数は大小合わせて2600以上、１ページ37行詰めで各巻600～800ページ）は、さらに、無数の図版・図表（タイトル・ページを飾る銅版ヴィネットは措くとしても、巻頭の186葉におよぶ当時の著名人の銅版肖像、2700葉以上の図解用の［一部折り込み］銅版図版、同じく180葉をこえるリトグラフ図版、そして多数の説明用の図表）によって補完されています。現代の百科事典の利用を想起するだけで、本書の現代の利用者にとって、このことがいよいよもって貴重であることには贅言を要しないでしょう。

では、本書はどのくらいの部数出版され、どのくらい売れたのか？　残念ながらそれは分かっていません。創刊後しばらくして既刊分の第二版が出版され、複数巻の抜粋版や種々の項目の抜刷や、さらには大判のカラー版が出されていますし、書評もおおむね好評ですから、本書が読書界に受け容れられたことは間違いないことでしょう。それでいて、本書は、とりわけその全巻揃いは、その理由を考えるのも一興ですが、世界的にもきわめて稀少なのです。図書館の方にも本書の所蔵箇所を検索していただきましたが、日本では東大に第30巻と第61巻があるのみです。ドイツではベルリンのプロイセン国立図書館、ケルンの大学図書館と市立図書館が完本を架蔵しています。スエーデンのリンチェーピング市立図書館には全巻が揃っているのにたいして、パリの国立図書館は終わりの23巻分を欠いており、大英図書館にも揃いはありません。アメリカでは議会図書館をはじめ、スタンフォード大学図書館、ミシガン大学図書館、コロンビア大学図書館その他が全巻所蔵しています。そして、復刻版とマイクロフィッシュ版がゲオルク・オルムス社（Georg Olms Verlag）から出版されています。

最後に：百科事典は総じて、それが執筆・刊行された時代を大規模に反映するもので、過去と未来への展望を与えてくれる一大データ・ベースとして機能しうるものです。大部なものほど、軟弱な教養主義とは無縁に、時代の文化的現実を支える文明的現実を如実に記述するとともに、文明的現実を規定している文化的構想を内包しているものです。18／19世紀のドイツのみならずヨーロッパにおけるその決定版とも言える百科事典が、本書です。この時期の特にドイツの「経済」と「技術」と「文化」について調査・研究する者に本書が計り知れない情報と便宜を与えてくれるという意味でばかりでなく、本書そのものの調査・研究がまたさまざまな興味深い成果をもたらしうるという意味でも、私は本書の意義を確信しています。

（2001年9月）

Oekonomische
Encyklopädie,
oder
allgemeines System
der
Staats-, Stadt-, Haus- und Landwirthschaft,
in alphabetischer Ordnung;
von
D. Johann Georg Krünitz.
Erster Theil,
von A bis Am. Mit 21 Kupfern.
Zweyte Auflage.
Berlin, 1782.
bey Joachim Pauli, Buchhändler.

第1巻タイトルページ

第９回INNOVATIVEユーザ会参加報告

河口　和子（学術情報課）多田　智子（雑誌課）

図書館のWINEシステムは、米国Innovative社製の図書館システム・ソフト、INNOPACを使っている。INNOPACのユーザである図書館のスタッフが世界中から集うInnovative Users Groupの年次大会本会議が、本年５月20日～22日、カリフォルニア州サンタクララのコンベンションセンターで開催され、早稲田大学図書館から私たち２名が参加した。大会参加者数は約1,200名である。

General Opening Session

はじめに参加者が広いホールに集まり、開会のイベントが行なわれた。

INNOPACのユーザは年々増加しており、2001年は780図書館に達したとの報告があった。

個別セッション

会議場の各部屋で並行してテーマ別セッションが行なわれ、参加者はそれぞれ興味のあるセッションを選んで出席する。今年は、のべ134セッションが用意されていた。

セッションはおおまかに分けると、
①Innovative社のスタッフが新しいモジュールなどを紹介するセッション
②ユーザである図書館の館員が、どのようにシステムを利用しているかを発表するもの
③参加者が自由に意見を交換するフォーラム
の３種類がある。私たちは2名で、このうちの22セッションに参加。Web版の業務用モードであるミレニアム製品に関するセッションが多かった。

どのセッションも質疑応答が非常に活発なのが印象的であった。

レセプション

初日の夜にAll Conference Reception、２日目夜にはInternational UserのためのSpecial Receptionが開かれた。会議場に隣接するホテルの庭に飲み物と軽食が用意され、参加者同士が歓談し交流を深めるものであった。

All Conference Receptionは大勢の人が参加し、スタッフらによる軽音楽の演奏も添えられ、非常に和気藹々とした雰囲気であった。Special Receptionでは、Innovative社のスタッフとも親しく話をすることができた。

Innovative社スタッフとのミーティング

Innovative社のCustomer Services Departmentのスタッフから、あらかじめ提案があり、大会最終日に約1時間のミーティングを持った。

早稲田大学図書館は日本で最初の、かつ現在のところ唯一のユーザであり、Innovative側は「何か困っていることはないか」「あなたがたのスタッフ、利用者はINNOPACに満足しているか」と非常に気にかけている様子であった。

現在、WINEシステムがかかえる最も大きな問題は、処理待ちデータがたまり、処理が終わるまでに時間がかかってしまうことである。

例えば、ある利用者が本を返却した場合、返却した本のレコードと、その利用者のレコードとに変更の処理が行なわれる。この処理が終わるまでは、レコードはロックされ、別の変更を加えることができない。順調に処理が流れている場合はごく短時間なので問題にならないが、処理に時間がかかる場合、同じ利用者が改めて本を借りようと

サンタクララ　コンベンションセンター

しても、この間は貸出ができない状態になる。

貸出・返却が集中する時間帯など、システムの処理が追いつかず、未処理件数が数千件に達して、利用者の方にご迷惑をおかけする場合がある。

大会の参加者数人に尋ねてみたが、同様の障害はないようであった。おそらく日本語処理の問題が関係していると思われるが、はっきりした原因はつかめていない。

ミーティングでは未処理件数の推移を示すグラフを示し、非常に困っている旨訴えたところ、Innovative側も深刻に受け止め、調査を行うことを約束してくれた。

ユーザ会会場にはこの他、III社デモルーム、ベンダー用展示ブース、Internet and E-mail ルームなども用意されていた。

また、会議初日には展示ブースにも出展していたCheckpoint社の自動貸出返却システムRFIDを導入したサンタクララ市立図書館の見学にも参加した。

次回第10回のユーザ会本会議は2002年4月28～30日に、テキサス州ヒューストンで開催予定。

カリフォルニア大学バークレー校訪問

ユーザ会が終わった翌日、カリフォルニア大学バークレー校を訪問した。バークレー校にはMain Libraryをはじめ多くの図書館があるが、このうちLaw LibraryがINNOPACを使用している。私たちの訪問にあたり、大勢のスタッフが対応してくださったが、雑誌の製本、所在不明本の扱い、予算管理など、合理的で参考になった。

この後館内を見学させていただいた。館内のサインが非常にわかりやすいこと、身障者用のコピー機が設置されていたこと、情報コンセントを備えパソコンを持ち込んでの利用のみに限定する“PC Use Only”の机がかなりの数用意されていたことが印象的であった。

バークレー校の東アジア図書館は日本国外の大学図書館としては最大の日本資料のコレクションを有し、日本人の司書の方が2名勤務している。見学させていただき話をうかがったが、早稲田大学が提供した和書のOCLCデータやWINEのデータを目録作成におおいに参考にしているそうである。早稲田への期待の大きさに驚くとともに、日本国内に目を向けているだけではダメで、世界はボーダーレスであるということを実感した。

感想：

参加したセッションの内容もさることながら、日頃メールでのやりとりしかしていないInnovative社のスタッフと直に会って話をすることができ、またほかのINNOPACユーザと情報交換する機会を持てたのが収穫であった。ユーザ会の出席者は７割方女性で、女性のシステム担当者も多かった。参加者たちが大会を楽しみ、積極的に参加する姿勢を持っていることに感心した。

今回は早稲田側でかかえる問題の解決をInnovative社側に要求することが最大の課題であったが、無事役目を果たすことができほっとしている。（河口）

これまで学術情報課を中心に参加してきたこのユーザ会に「できればシステムを使用する現場からの参加を」との金子課長からの呼びかけに、我が身を顧みず参加させていただいた。

雑誌業務は、現在のTelnet版に比べて全ての業務が移行できないとは言え、逆に操作性ではWeb上でのミレニアム版の方が優れているようである（ただし雑誌業務のみミレニアムからの逆戻りは保障されない）。

早稲田大学図書館採用のINNOPACが今後どのように推移していくかはわからないが、多くの館員が雑誌業務に親しみを持ち、ひいては広く雑誌サービスの拡大につなげていけるよう協力することができれば、今回の会議参加の意義が果たせるのではないかと考えている。（多田）

展覧会開催報告　2001.3－7

展　示　部　会

竹西寛子展～その人と作品～

本年３月、教育学部でながく教鞭をとっておられた小説家・文芸評論家の竹西寛子先生が早稲田大学芸術功労者として表彰された。図書館ではこれを記念し、３月23日から４月19日にかけて「竹西寛子展～その人と作品～」を開催した。

この時期、展示室ではすでに「館蔵資料でたどる20世紀の歴史展」を開催することが決まっており、急遽、図書館４階の図書館ラウンジを会場としたのだが、展示ケース４台に加え壁面やケース周辺にパーテーションを運び込むと、ちょっとしたギャラリー風となった。

展示資料は館蔵の稲門ライブラリーにある竹西先生の著作を中心に考えていたのだが、教育学部の小林保治教授、東郷克美教授の御尽力により、竹西先生ご自身のご協力をいただけることとなり、その結果、自筆原稿や先生がこれまでに受賞されたさまざまな文学賞の関係資料、さらには幼少時からの写真等多くの貴重な資料が出陳されて、充実した内容の濃い展示とすることができた。特に写真には竹西先生の言葉（竹西氏の随筆などから小林先生が抜粋）を添えることでいっそうの広がりを見せ、来場者の興味を引いていた。

会場までの導線がわかりにくいこともあり、どれほどの来場者があるか不安だったが、竹西先生の作品の読者の方々をはじめ多くの学外者も足を運んでくださり、予想以上に盛況であった。また会期中、竹西先生とご一緒に作家の永井路子、杉本苑子、俳人の和田知子の各氏が来場された。

本展示開催にあたって多大なご尽力を賜った小林先生、東郷先生、そしてなにより、資料提供だけでなく、展示全般にわたってさまざまなご助言をしてくださった竹内寛子先生に改めて厚く御礼申し上げる次第である。　（文責・藤原）

館蔵資料でたどる20世紀の歴史

卒業・入学のシーズンである３月末から４月中旬にかけて、例年どおり館蔵資料による展示をおこなった。

テーマは、1999年が「日本文学史」昨年は「日本の歴史」と続いているが、新世紀の幕開けである2001年は「20世紀の歴史」をとりあげてみた。

展示したものは、日露戦争・第一次世界大戦・関東大震災・二・二六事件・第二次世界大戦・文化大革命・ベルリンの壁崩壊など、20世紀の歴史ドキュメント資料約70点である。

戦争や革命、災害などと、どうしても暗いニュースが多くなってしまったが、会場に置いた観覧者による感想ノートをみると、おおむね好評だったようである。学生を中心としてかなり多くの来場者があった。館蔵資料に加えて、館員個人蔵の雑誌や新聞、ポスターなど数点を参考資料として補ったことで、インパクトのある、わかりやすい展示になったのではないだろうか。

ほぼ同時期に「竹西寛子展」を開催したため準備にかける時間が限られてしまい、目録などは簡単なものにせざるを得なかったのが残念である。

会期は３月24日（土）より４月24日（火）まで、総合学術情報センター２階展示室において開催した。卒業式と入学式の行われた３月25日（日）と４月１日（日）も開室した。　（文責・大坪）

「館蔵資料でたどる20世紀の歴史」展

挿絵　－物語を彩るイメージの世界－

例年５月に行われる「オール早稲田文化週間」参加の図書館企画展示として、５月10日（木）より２階展示室にて標記の展覧会をおこなった。

展示のテーマもだんだんとネタ切れになってくるので、ともすれば以前にやった蘭学とか古文書とか引札、双六、錦絵などのリメイクでお茶をにごしたいという誘惑にかられるが、つねに新しいテーマを開拓するのが本筋であると考え、ない知恵をしぼっている。今回は絵巻物、奈良絵本から近代小説の口絵まで、「さし絵」にスポットをあててみた。

簡単でたのしい展示のように見えるかもしれないが実は準備が大変で、明治期の小説本の木版色刷りの口絵がどんな場面なのか解説を書くために、委員が手分けして古めかしい小説を読まねばならなかった。明治期小説の口絵は水野年方、梶田半古、鏑木清方など高名な日本画家が筆をとっていて、なかなか見ごたえのあるものが多い。会期中には、明治期小説本のコレクションを寄贈下さった校友・故手塚昌行氏の母堂手塚幸子さんも見えられ、感慨深げに展示に見入っておられた。

早稲田大学図書館には、瀧澤馬琴、坪内逍遥ら著者みずからが画家にさし絵のイメージを指定した、「挿絵指定画」というめずらしい原本資料がある。挿絵そのものとならべてこれらの資料を展示したので展示に厚みがでた。

評判は上々で、会場に置いたノートには「内容への興味をそそられる説明がよかつた」「とても興味深くおもしろかった。また、企画してほしい」「これだけのものを展示公開できる早大はすばらしい。図録が欲しい」などといった好意的な感想が相次ぎ、思わず６月下旬まで会期を延長したほどだった。この企画は10月末に千葉県鴨川市立図書館でも開催した。　（文責・松下）

錦絵にみる近代日本の夜明け展

６月30日から７月15日まで、「早稲田フェスタin遠州2001」の関連企画として、静岡県磐田市立図書館において「錦絵にみる近代日本の夜明け展」を開催した。

昨年、この「早稲田フェスタ」で新企画として早稲田大学図書館の所蔵資料を用いた展覧会「江戸・明治の広告展」を初めて開催し、大変に好評を得たため、本年も引き続き展覧会を行うことになった。

当館の資料の中でも、観覧者が興味を抱きやすい身近な貴重資料を展観するという考え方は前回と変わらず、その意味で今回は「錦絵」を選んだ。幕末から明治にかけて作られた多色摺り木版画による「錦絵」は、当時の世相や庶民生活、事件や政治事情、社会諷刺などを細かく描き込み報道の役割も果たしていたといえる。技術的にも、絵師、彫師、刷師の技が相俟ってレベルが高く、芸術作品の美しさも充分に備えている。黒船来航から横浜の開港、幕末の動乱、文明開化の街並、自由民権運動から国会開設ににいたるさまざまな場面を活写した錦絵60余点が展示され、会場の壁面は色彩に満ち、賑やかであった。

観覧者にアンケートを実施したが、「いちばん興味をもって観た資料はなんですか」という質問の答えで一番多かったものは「西南戦争」であった。西郷人気なのであろうか。

前回同様「中日新聞」「静岡新聞」で当展の開催情報が掲載され、ポスターや案内葉書も効果的に配布されたこともあって、地元磐田、浜松での評判は高く、入場者は1,693人であった。

（文責・岩佐）

これからの展覧会予告

12／12(水)～1／26(土)　於　展示室

「漂流――異界を見た人々――」展

鎖国下にあった江戸時代、船が難破して心ならずもロシアへ漂着した大黒屋光太夫をはじめ、異国へ漂流した人々についての資料と、日本・世界の漂流文学について展示する。

おもな展示品：北槎聞略付図・芝蘭堂新元会図・清国漂流記・海外新聞ほか

3／20(水)～4月末　於　展示室

「描かれた生き物たち――館蔵資料にみる動植物図譜――」展

館蔵資料のうちから、さまざまな時代に描かれた動植物の絵をえらび並べる。人間とともに生きてきた鳥獣、草木のすがたから浮かび上がる人類文化史の断面。

新しい情報検索サービス

藤巻　俊樹（調査役）

図書館はこれまでもいくつかのデータベースを契約しWWW環境で提供してきましたが、本年7月から学位論文検索データベースである“Index to theses with abstracts accepted for higher degrees by the universities of Great Britain and Ireland”、10月から言語学論文検索データベースである“Linguistics abstracts online”を提供しています。

Index to theses

Index to thesesは、英国とアイルランドの大学で受理された全分野の学位論文の抄録が収録されています。

冊子体としても1950年から刊行されていますが、オンライン・データベースは冊子体を継続購入している機関に提供され、1967年以降のデータが収録され一括検索が可能です。

4つのレベルの検索方法が用意されて初心者から熟達者まで容易に検索できます。

Quick Searchはひとつ、または複数の検索語とAND, OR, AND NOT等のブール演算子を使用して検索が可能です。

Simple Searchは論文タイトル、著者、抄録（要約）中の語を入力し、大学一覧や分野一覧、授与年から選択して検索が可能です。

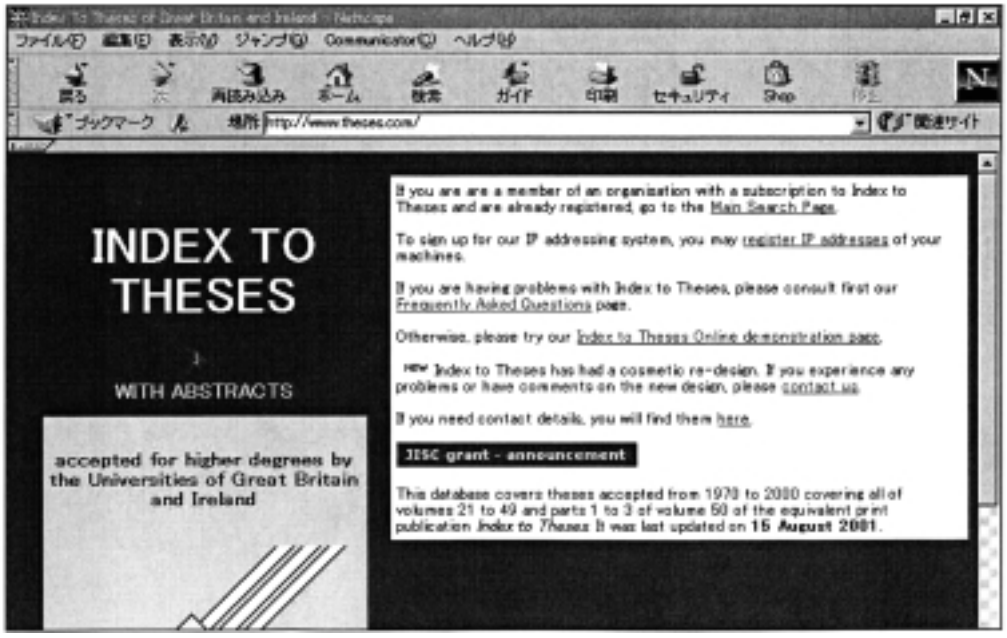
Standard Searchは論文タイトル、著者、学位、分野、授与年、抄録（要約）の項目を選択し、入力域に自由に検索語を入力して検索が可能です。さらに、or・andを選択して複合検索も可能です。

Advanced Searchは検索式を作成して高度な検索が可能です。

学位論文の全文の多くは、British Library Document Supply CentreのBritish Thesis Service（http://www.bl.uk/services/bsds/dsc/brittheses.htm）を通しても直接入手可能ですが、図書館レファレンス・カウンターにご相談ください。

詳細は、図書館トップページ→DB, 電子ジャーナル→Index to Theses（http://www.wul.waseda.ac.jp/DOMEST/itt.html）をご覧ください。

『ふみくら』No.65でご紹介したProQuest Digital Dissertationsは、欧米(主として北米)の人文社会科学系の学位論文を対象としています。併せてご



活用ください。

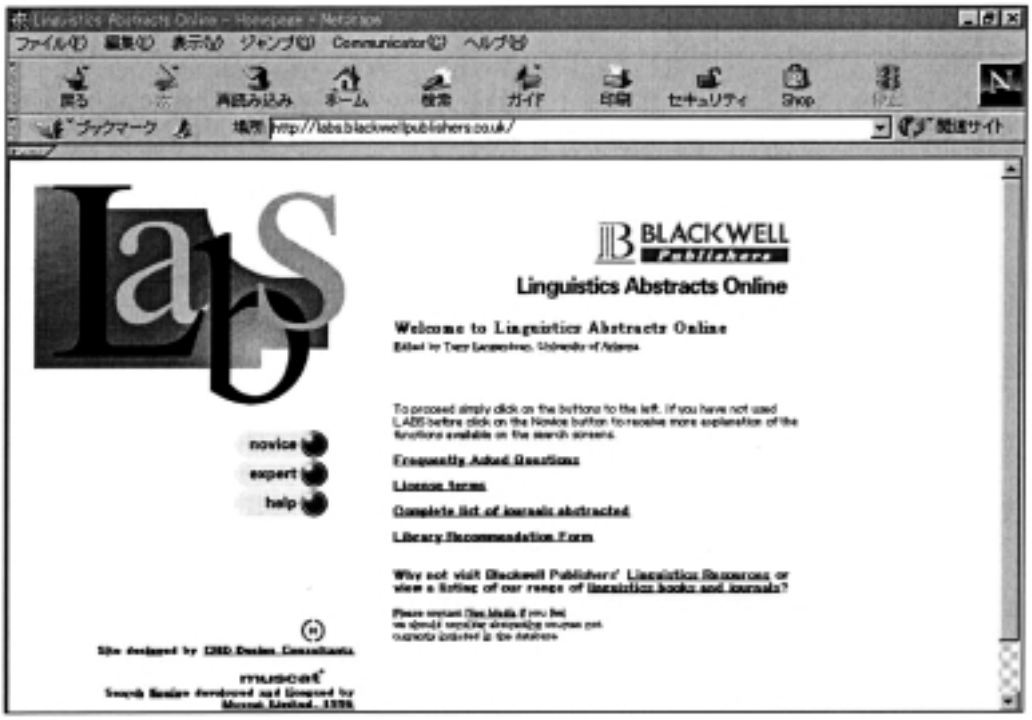
Linguistics abstracts online

Linguistics abstracts onlineは、300近く(現時点で298)の言語学関係雑誌に収録された論文を対象とし、書誌情報と論文の抄録(要約)が収録されています。

冊子体としても1981年から刊行されていますが、同内容のものが一括で検索可能であり、随時追加・更新されて提供されています。

ひとつ、または数語の検索語を入力すると、適合度の高い順に論文タイトル、著者、収録雑誌タイトル・巻号(刊行年)、ページ、分野、検索語に対する適合度等が一覧表示され、個々の論文を選択することにより、アブストラクト(抄録)が表示されます。また、一覧表示からひとつ、または複数の論文を選択して論文からインデキシングされた関連語を追加選択することにより、関連主題の論文を再検索することが可能です。

詳細は、図書館トップページ→DB, 電子ジャーナル→Linguistics Abstracts Online（http://labs.blackwellpublishers.co.uk/）をご覧ください。



慶應義塾大学図書館・同志社大学図書館との相互協力
－学内図書館と同じようにご利用いただけます－

既に「CAMPUS　NOW」や「早稲田ウィークリー」でお知らせしましたように、今年度から慶應義塾大学との図書館利用について、協定の見直しを行ないました。また、学部学生の交流を行なっている同志社大学とも同様の協定を結びました。対象となる図書館は、以下のとおりです。

慶應義塾大学：三田・日吉・理工学・湘南藤沢メディアセンター、白楽サテライト・ライブラリー。他に経営管理研究科図書館（ＫＢＳ）は、早稲田大学図書館から事前の電話連絡が必要。医学メディアセンターは、従来どおり紹介状での利用。

同志社大学：同志社大学図書館（今出川校地）、ラーネッド記念図書館（京田辺校地）

☆貸出のできない資料、利用できない施設などについては、各々の図書館で異なりますので、ご利用の際に確認してください。

両大学図書館で利用できるサービス

●IDカード（教職員証、学生証。早稲田大学の助手は身分証）で、紹介状なしで利用できます

昨年度は慶應義塾大学宛に中央図書館から176通の紹介状を発行しましたが、今年度は９月までの６か月間に326人の利用者がIDカードで利用させていただきました。慶應からも、既に昨年度１年分の２倍以上、469人の利用がありました。戸山図書館でも昨年度１年の数字を半年で超えて慶應から31人の利用がありました。

同志社は、やはり離れているため早稲田からは19人、同志社からは21人にとどまっていますが、紹介状時代に比べ利用は大幅に増えています。

● 教職員・助手は相手館で登録して個人貸出を受けることができます

年度内有効のカードが発行されます。貸出冊数、期間などについては相手館の規定に従いますので登録の際にお尋ねください。返却期限内であれば慶應へは、中央、理工学、所沢図書館からメール便を利用しての返却が可能です。同志社へは、郵便書留、宅配便（個人負担）での返却もできます。登録の際にはＩＤカードを必ずお持ちください。

●ILL（図書館相互協力）による資料の申込

教職員、学生、図書館緑カード、青カード①②をご使用の方は中央、理工学、所沢図書館で図書または、文献複写の取寄せ申込みができます。ただし、複写料金、郵送料は個人負担となります。

昨年度、慶應とのILL件数は、約2,000件弱ずつでしたが、双方とも複写依頼が借用依頼を上回っており、早稲田からの方が借用依頼が多く、慶應の方が複写依頼が多いのが特徴です。理工学図書館でも、双方ほぼ同じ件数でほとんど複写依頼でした。所沢図書館では複写も借用も早稲田からの方が圧倒的に超過しています。これは所沢からの医学関係資料の申込みが多いためと思われます。

今年度上半期の利用は以下のとおりです。

ILL利用状況　(2001/4-9)

慶應

	図書貸借	複　写	計
中央　申込	440	600	1,040
慶應から	332	747	1,079
理工　申込	8	320	328
慶應から	18	273	291
所沢　申込	16	373	389
慶應から	21	156	177
早稲田申込計	464	1,293	1,757
慶應から計	371	1,176	1,547

同志社

	図書貸借	複　写	計
中央　申込	27	151	178
同志社から	11	127	138
理工　申込	0	0	0
同志社から	0	132	132
所沢　申込	0	8	8
同志社から	0	20	20
早稲田申込計	27	159	186
同志社から計	11	279	290

問合せ先：図書館総合閲覧課（内線71－5145）

高額資料選定結果　2001.3－7

資　料　委　員　会

太神宮法楽百首　十市遠忠自筆　一冊
［申　請　者］兼築信行（文）

室町時代の大和国の豪族、十市遠忠（とおちのとおただ、1497～1545）自筆の自詠和歌百首。全くの新出資料であり、室町期和歌研究における一級資料。当図書館では、さきに『十市遠忠三十番歌合』（図書館紀要44号に紹介）を収蔵しており、あわせて当該分野の研究に裨益する。

曽我物語　江戸初期写　全十二冊
［申　請　者］日下力（文）
［共同申請者］大津雄一（教育）竹本幹夫（文）
兼築信行（文）

軍記物語として有名な『曽我物語』であるが、当図書館にはこれまで、写本が所蔵されていなかった。本資料は従来知られているものとは異なる本文を有しており、曽我物語仮名本の成立・流布の研究に示唆を与えるものといえる。

Cabinet Papers：complete classes from the CAB & PREM series in the Public Record Office series 3（microfilm）（英国閣議文書）
［申　請　者］松園伸（文）
［共同申請者］近藤申一（政経）飯島昇蔵（政経）
中野忠（社学）

1945年のアトリー内閣から1968年のウィルソン内閣まで、第二次世界大戦後のイギリスの閣議記録。戦後イギリス政治史研究上きわめて重要な史料である。本図書館にはBPP（マイクロフィルム）など議会側資料も充実しており、イギリスの政治、経済、社会に関する研究に裨益する。

図 書 館 日 誌

3. 1　琉球大学附属図書館館長来訪
3. 7　バングラデシュ選挙管理委員長来訪
3.12　ブルネイ・ダルサラーム大学副学長来訪
3.13　コロンビア大学国際関係・公共政策大学院院長来訪
3.14　九州大学附属図書館職員来訪
3.16　愛知淑徳大学図書館情報学科学生見学
3.23　芸術功労者表彰記念「竹西寛子展」於中央図書館４階図書館ラウンジ（4月19日まで）
中央図書館消防訓練
早慶図書館管理職者懇談会
3.24　「館蔵資料でたどる20世紀展」於中央図書館展示室（4月24日まで）
理工学図書館蔵書点検（31日まで）
3.25　卒業式につき自由見学（中央図書館、戸山図書館、理工学図書館）
3.26　ノルウェー国王訪日記念展示
3.29　ノルウェー工科自然科学大学学長来訪
3.30　「早稲田大学統合マルチアーカイビングサービス（IMAS)」完成記念披露式典
4. 2　マプア工科大学（フィリピン）総長来訪
東義大学校（韓国）総長来訪
4. 3　中央図書館新入生オリエンテーション開催（７日まで)
4. 4　コスタリカ共和国大統領来訪
4. 5　ミニア大学（エジプト）副総長来訪
4. 6　嶺南大学（香港）図書館員来訪
4.11　中央図書館Web of Science講習会開催
4.17　ハイファ大学（イスラエル）大学研究部長来訪
4.18　オランダ高等防衛学院一行来訪
4.19　ヨルダン大学総長来訪
4.23　ハバロフスク経済法律アカデミー学長来訪
4.24　ユネスコJAFSA韓国大学国際交流担当者訪日団来訪
4.25　図書行政懇談会（第二次）（第１回）於国際会議場第三会議室
5. 9　全南大学校（韓国）学長来訪

5.10 アテネ大学学長来訪
「挿絵－物語を彩るイメージの世界」展 於中央図書館展示室（24日まで）
5.11 武漢大学（中国）副校長来訪
5.14 中央図書館学術情報検索講習会(18日まで)
5.17 「人間科学部デー展示会」於所沢図書館（20日まで）
5.19 オープンキャンパスにつき中央・戸山図書館自由見学
5.25 国連平和大学(コスタリカ共和国)学長来訪
5.26 大東文化大学板橋キャンパス整備計画担当者来訪
5.28 上海市青少年友好交流団来訪
5.29 マールブルク大学（ドイツ）学長来訪
5.30 図書行政懇談会（第二次）（第２回）於国際会議場第三会議室
6. 4 サマルカンド国立大学（ウズベキスタン）学長来訪
6. 6 エルサルバドル共和国副大統領、ホセ・マティアス・デルガード大学副学長来訪
6. 6 大連外国語学院（中国）副院長来訪
6. 6 高麗大学校図書館長来訪
6.11 上海師範大学副校長来訪
6.12 ケースウェスタン・リザーブ大学一行来訪
6.15 ネバダラスベガス大学ホテル経営校校長来訪
6.19 ベルリン・フンボルト大学副学長来訪
所沢図書館 WINE講習会（22日まで）
6.20 駐日インド特命全権大使来訪
6.26 高麗大学校教育研修団来訪
6.27 図書行政懇談会（第二次）（第３回）於国際会議場第三会議室
6.29 図書館協議員会（第１回）於国際会議場第三会議室
6.30 「早稲田フェスタin遠州2001錦絵にみる近代日本の夜明け展」於磐田市立図書館展示室（7月15日まで）
7. 2 高麗大学校図書館長来訪
7.10 ユタ大学学長来訪
7.17 第２回太平洋学長サミット参加者来訪
7.21 高田早苗記念研究図書館長期貸出開始（8月10日まで）
7.27 図書行政懇談会（第二次）（第４回）於国際会議場第三会議室
7.29 オープンキャンパスにつき中央・戸山図書館自由見学
8. 1 中央図書館、戸山図書館、所沢図書館長期貸出開始（9月20日まで）
8.22 台風接近にともない中央図書館・キャンパス図書館臨時休館
8.28 高麗大学校図書館長他職員一行来訪（30日まで）
9. 3 図書館実習生受入（慶應義塾大学学生と立教大学学生（14日まで)、図書館情報大学学生（21日まで)）
9. 5 太平洋諸島青年招聘計画事業参加者来訪
9. 6 ブランデンブルグ州廃棄物対策部長来訪
9.12 ノルウェー科学技術大学図書館職員来訪
9.20 マレーシア国立サラワク大学IT委員会メンバー来訪
9.25 中央図書館オリエンテーション(28日まで)
9.30 オープンキャンパスにつき中央・戸山図書館自由見学
10. 3 私立大学連盟研修生受入
10. 4 カンタベリー大学（ニュージーランド）学長来訪
10. 6 エルフルト大学学生見学
10. 9 NRW州議会（ドイツ）科学委員会メンバー来訪
10.10 インドネシア大学国際センター長来訪
10.10 ヘブライ大学学長来訪
10.11 国立国会図書館外部機関実習生（2名）受入（12日まで）
10.12 トランシルバニア大学法学･社会学部長来訪
10.17 ホームカミングデー参加企画「挿絵：物語を彩るイメージの世界」展　於中央図書館展示室（23日まで）
10.18 ルーヴァン大学（ベルギー）学長来訪
10.19 第51回国公私立大学図書館協力委員会
10.22 ワシントン州立大学人文学部長来訪
10.24 プノンペン王立大学学長来訪
10.24 モナシュ大学（オーストラリア）英語学センタープログラム責任者来訪
10.27 「挿絵：物語を彩るイメージの世界」展 於鴨川市立図書館集会室（11月4日まで）
10.31 図書行政懇談会（第二次）（第５回）於国際会議場第三会議室

早稲田大学図書館報　ふみくらNo. 68　2001年12月15日発行　3,500部
発 行 人／浦川道太郎
担当課長／吉田伸一　編集委員会／尾関淳子・高橋晶子・渡邊孝之
発　行／早稲田大学図書館　〒169-8050　東京都新宿区西早稲田１－６－１　☎5286－1652（ダイヤルイン）
ISSN 0289-8926